

# 壮大な音楽プロジェクト「千住だじゃれ音楽祭」潜入レポート！ ～リハーサル編～

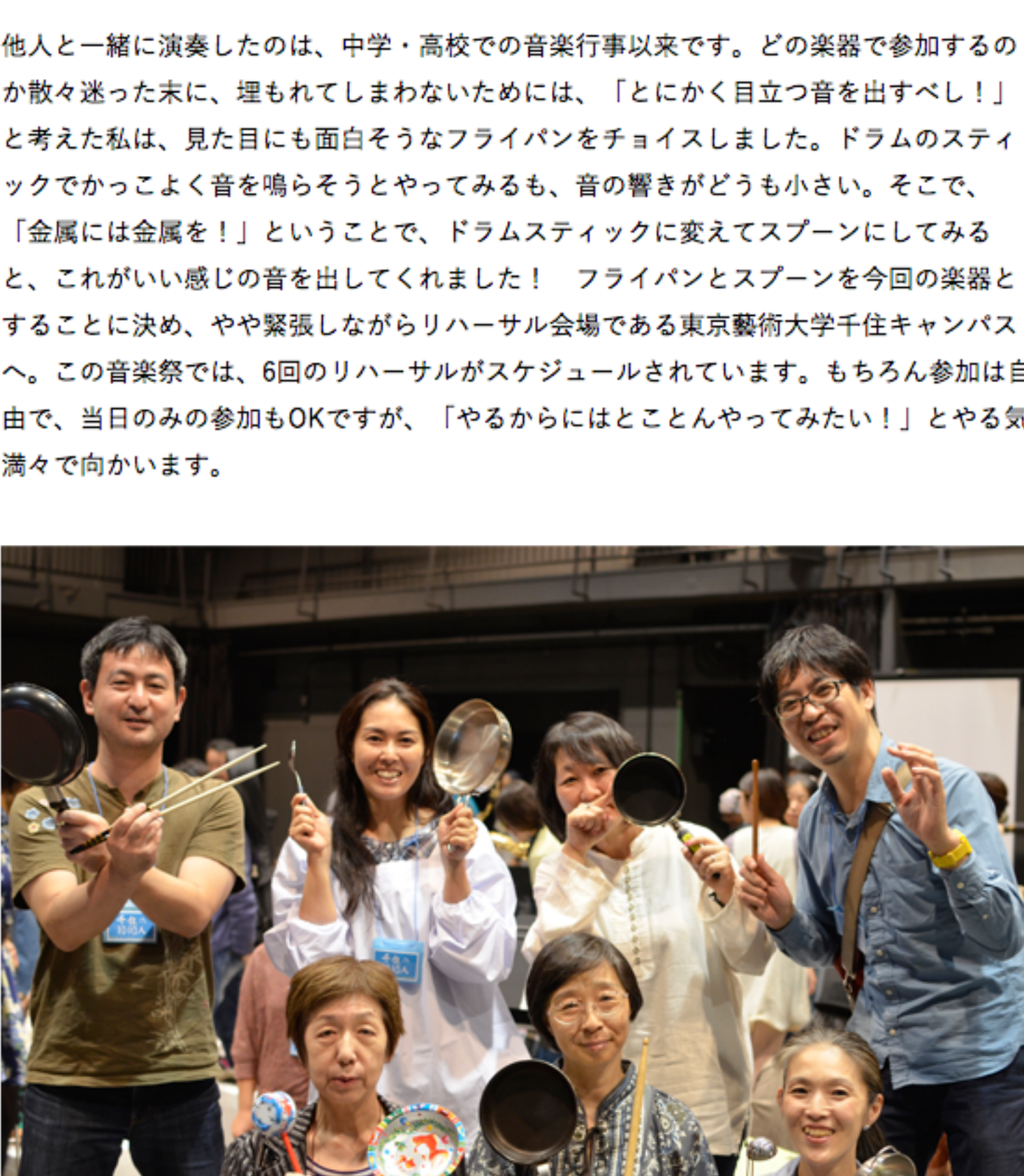
2014.10.29

いいね! 68 ツイート 0

秋の夜長は落ち着いた雰囲気クラシックを聴く——なんてイメージもあるかもしれませんが。静かなイメージのある「秋の音楽」ですが、「あらゆるものを楽器として1000人以上が演奏に参加する、ちょっとアジアな音楽祭があるらしい」という話を聞きつけ、編集部が「千住だじゃれ音楽祭」に潜入取材してきました！

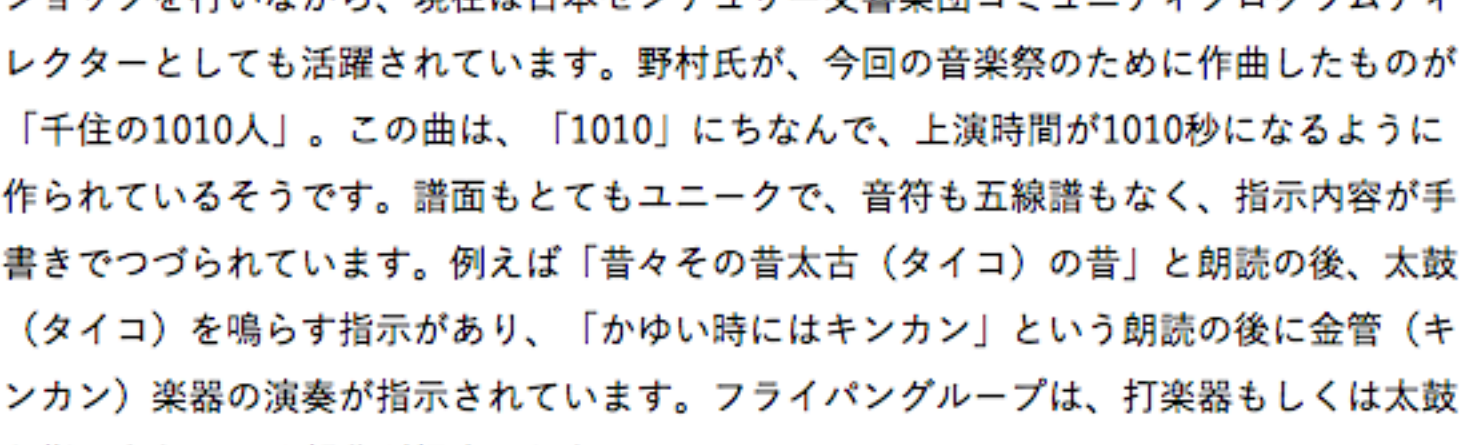
募集参加者は、千住（せんじゅ）にかけて1010人！ 使う楽器は、箏（こと）や小鼓などの邦楽器、ギターや鍵盤ハーモニカ、リコーダー、管楽器をはじめ、フライパンなどの日用品から、瓦、紙太鼓などなど。さらには、タイの伝統楽器であるピバットと、インドネシアの伝統楽器であるガムランも登場する、アジアンフレーバーたっぷりの音楽祭です。

縄跳びあり、紙飛行機あり、音楽劇あり、誰でも参加できるこのイベント。はたして、アジアの伝統楽器と邦楽器、西洋楽器や日用品を使った演奏はどうなるのでしょうか？ だじゃれと音楽の融合とはどんなものなのでしょうか？



## フライパンを片手にいざリハーサルへ

他人と一緒に演奏したのは、中学・高校での音楽行事以来です。どの楽器で参加するのか散々迷った末に、埋もれてしまわないためには、「とにかく目立つ音を出すべし！」と考えた私は、見た目にも面白そうなフライパンをチョイスしました。ドラムスティックでかっこよく音を鳴らそうとやってみるも、音の響きがとても小さい。そこで、「金属には金属を！」ということで、ドラムスティックに変えてスプーンにしてみると、これがいい感じの音を出してくれました！ フライパンとスプーンを今回の楽器とすることに決め、やや緊張しながらリハーサル会場である東京藝術大学千住キャンパスへ。この音楽祭では、6回のリハーサルがスケジュールされています。もちろん参加は自由で、当日のみの参加もOKですが、「やるからにはとことんやってみたい！」とやる気満々で向かいます。



初めてお会いした同じ日用品メンバーとあいさつし、互いの楽器を褒め合います。「太鼓のバチもありますよ」

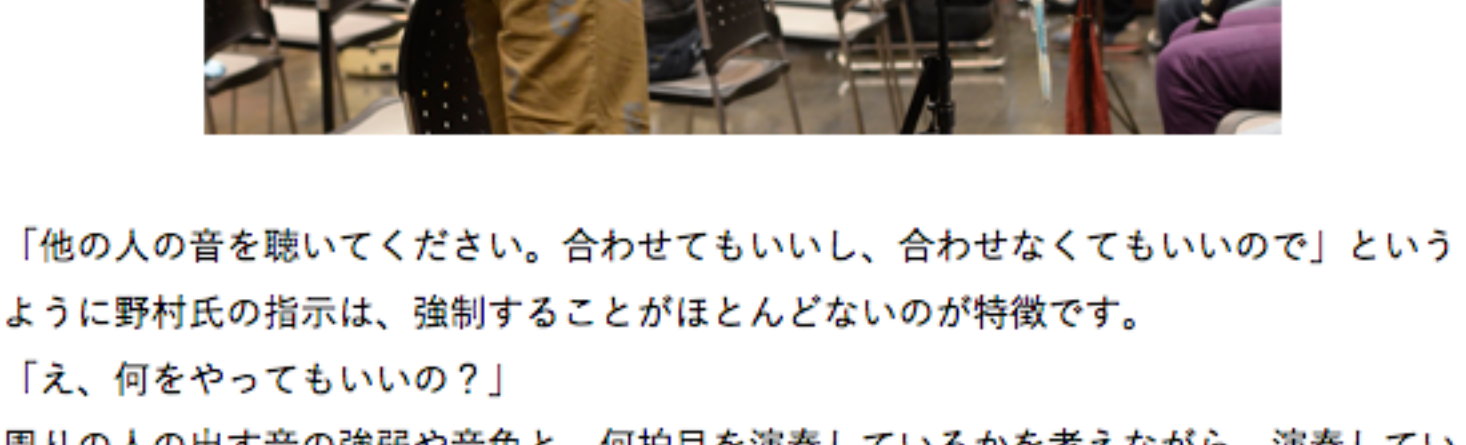
「ありがとうございます。でも、家にある日用品の中で、選び抜いた菜箸なので」「私もどんなものを使ったらいい響きができるか研究中なんです」

本格的な楽器や珍しい楽器が並ぶ中、互いに自宅の生活感あふれる日用品をドヤ顔で見せ合い語り合うのは、なかなか不思議な光景です。それぞれの小さな工夫をたたえ合います。

## だじゃれと音楽の融合とは？

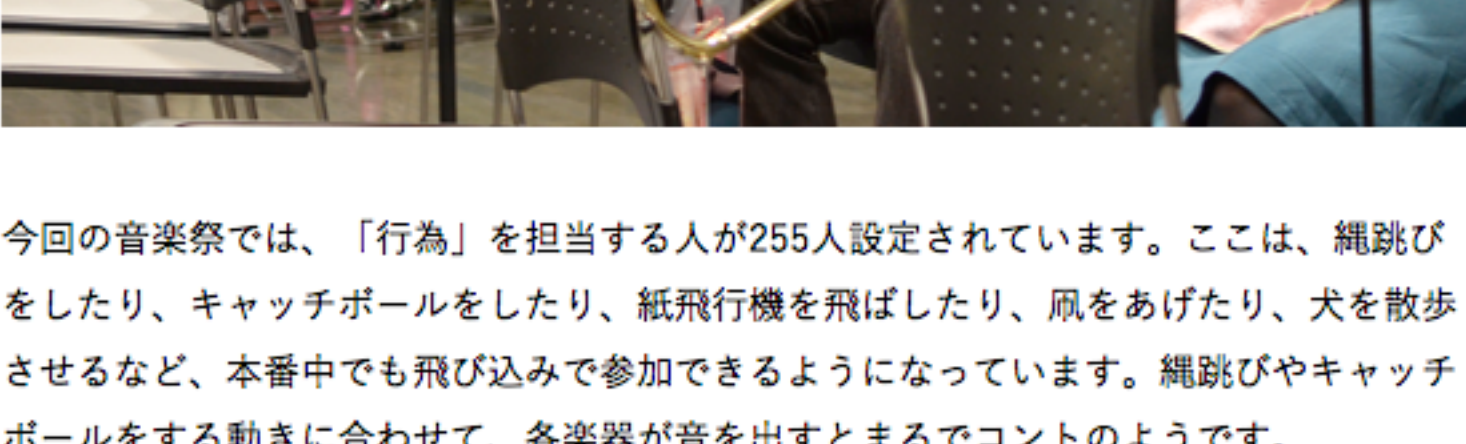
「だじゃれ音楽って何ですかね？」  
「・・・よくわかりませんね」  
「この曲、音楽祭のタイトルの『千住の1010人』も『せんじゅのせんじゅう人』でだじゃれになっていますよね」

この音楽祭のディレクターを務める野村誠氏は、各国で音楽を通じたさまざまなワークショップを行いながら、現在は日本センチュリー交響楽団コミュニティプログラムディレクターとしても活躍されています。野村氏が、今回の音楽祭のために作曲したものが「千住の1010人」。この曲は、「1010」にちなんで、上演時間が1010秒になるように作られているそうです。譜面もとてもユニークで、音符も五線譜もなく、指示内容が手書きでつづられています。例えば「昔々時の昔太古（タイコ）」と朗読の後、太鼓（タイコ）を鳴らす指示があり、「かゆい時にはキンカン」という朗読の後に金管（キンカン）楽器の演奏が指示されています。フライパングループは、打楽器もしくは太鼓と指示されている部分が担当でした。



「千住の1010人」の譜面です。指示内容がわかりやすく手書きでつづられています。

実際に演奏してみると、だじゃれのおかげで出番がわかる仕組みになっています。譜面を追うのではなく、大まかなストーリーと、それに沿っただじゃれの朗読や歌詞などから連想される楽器が演奏するようになっていて、わかりやすいです。例えば「空」というテーマの譜面では、リコーダーなど音階が出せる楽器で「ソラー」と吹きます。何度も繰り返して演奏しているうちに「ソラ」という音と「空」がつながって、屋の中にいるにも関わらず、なんとなく空を眺めながら演奏している気分になさるようになって不思議です。音譜が読めない人でも、子どもでも、誰でもすぐに演奏できるなんて！ 2回通してやった演奏の後には、だじゃれに愛着すら感じてしまいました。



「他の人の音を聴いてください。合わせてもいいし、合わせなくてもいいので」というように野村氏の指示は、強制することがほとんどないのが特徴です。

「え、何をやってもいいの？」  
周りの人の出す音の強弱や音色と、何拍目を演奏しているかを考えながら、演奏していくという感じです。

自由に演奏するなんて難しいと最初は思っていたのですが、他の人の音を聴きながら感覚的に演奏するのって、すごく楽しいことを知りました。

## 千住の1010人はこんな人たち！



今回の音楽祭では、「行為」を担当する人が255人設定されています。ここは、縄跳びをしたり、キャッチボールをしたり、紙飛行機を飛ばしたり、凧をあげたり、犬を散歩させるなど、本番中でも飛び込みで参加できるようになっています。縄跳びやキャッチボールをする動きに合わせて、各楽器が音を出すようとするコントのようです。

「当日は犬がワンというので、ワン！ ダ、フル！ となるように」と野村氏。

犬が「ワン」とほえたら、「ダ」では打楽器が一打、「フル」でフルートが音を出します。演奏しない人は「ワン！ ダ、フル！」と声を出します。

犬が予定通り鳴くのだろうか  
タレント犬なのかしら？  
楽器の音と共鳴する犬もいるかもしれないし、犬がほえ続けたらどうなるの？

リハーサル会場がぐすくす笑う声でざわめきました。



瓦をたたくと、瓦によって音が違いました！ 同じ瓦でもたたく場所によって、音が違います。ややくぐもった、やわらかな音があります。



「このリズムをもう一度確認させてください」など真面目に取り組みご婦人方。



小さなお子さんでも何人も参加していました。年齢や音楽経験を問わずに、誰でも参加できるって素晴らしいことですね！



インドネシアの民族楽器を総称してガムランと呼ぶそうです。鳴らしてみると、予想以上に音が広がります。



ガムランの装飾の美しいこと！ 竜や花々など金色に輝く装飾はとっても豪華でした。



こちらはピバットです。タイの伝統楽器の総称であるピバットをフルセットでそろえているのは、日本では神田外語大学のみだそうです。写真は、神田外語大のタイ音楽愛好会のみなさんです。



「瓦の音って面白いですよ」  
日用品チームの前に位置する瓦チーム。美しすぎる演奏姿に思わず声をかけてしまいました。楽器を選んだ理由や、その楽器にまつわる経験話、今回の音楽祭の練習についてなど、話題は尽きません。

リハーサルで行われた「もし違っても、ズレてもいいです。その音も演奏の一部になりますから」という野村氏の指導は、私にとって新鮮なものでした。楽譜から外れても、みんなから外れても受け入れてもらえるという、ゆるくあたたかい音楽はとても心地がいいものだと感じました。

タイの民族音楽学者アナン・ナルコン氏の「SUPER-FISHERMAN」と、インドネシアの作曲家メット・チャイルド・スラムット氏の「Senju2014」も練習し・・・いよいよ明日は本番です！

本当に1010人の参加者となるのでしょうか？  
人とだじゃれと音楽の融合は成功するのでしょうか？  
凧が上がり、犬がほえ、紙飛行機が舞う中、音楽祭は一体どうなるのでしょうか？

企画名	野村誠 千住だじゃれ音楽祭「千住の1010人」
日時	2014年10月12日（日） 15:00～17:00
会場	東京都卸売市場 足立市場
主催	東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人音まち計画、足立区
助成	国際交流基金アジアセンター
出演	野村誠、アナン・ナルコン、メット・チャイルド・スラムット、ほか1007人
URL	<a href="http://aaasenju.wix.com/senjuno1010nin">http://aaasenju.wix.com/senjuno1010nin</a>

いいね! 68 ツイート 0